

10

旧柳原銀行

やなぎ はら ぎん ぎん

京都市下京区

京都では行き止まりの場所を「どんつき」といいますが、河原町通を下ってきたバスが塩小路通と出会って京都駅の方へ大きくカーブをきるところは、そこから河原町通が急にせまくなるところから、どんつきの愛称で呼ばれていました。その交差点の南西の角に木造の洋風建物があり、立派な建物だが何だろーと、そこを通るひとの首をかしげさせていました。

実は、この建物はもと銀行として建てられたもので、名前は柳原銀行といい、全国でもめずらしい当時の被差別部落のひとつたちによってつくられた銀行でした。この辺りは一九一八年（大正七年）に京都市に編入されるまでは、京都府紀伊郡柳原町と呼ばれていました。銀行が設立されたのは一八九九年（明治三十年、資本金二万二千円で営業を開始しますが、現在の銀行の建物が建てられたのは一九〇七年（明治四〇年）のことでした。

設立の中心となった明石民蔵は、銀行経営のかたわら柳原町の町長もつとめた人物で、明治四年八月二十八日の「身分解放令」によって江戸時代の身分差別は廃止を宣言されたものの、なお社会の排斥はやまず、産業の不振によって差別と貧困に苦しんだ人々の生活向上と、自主的な改善運動のために力を尽く

した人物でした。明石たち柳原町の資産家たちは、銀行の設立によって町の産業を振興させ、ひいては町全体の改善につながることを期待したのです。そのため銀行の貸し付けも企業に対するものばかりでなく、層間の学校に行けない子どものために設立された夜学校の維持資金などにも、大量に貸し付けを行っていました。

柳原銀行は業績の拡大をねらって一九二〇年（大正九年）には、一挙に資本金を一六万二千五百円に増資するとともに、名称を山城銀行と変え、これまでの社屋を七条支店とし、あらたに四条西洞院に本店をもうけました。そして、翌年には乙訓郡向日町に乙訓支店、一九二三年には七条油小路に七条支店（それまでの七条支店は塩小路支店）、一九二四年には南桑田郡亀岡町の桑船銀行を買収、系列化するなど業務を拡大していきました。が、おからの金融恐慌で取付け騒ぎが飛び火し、一九二七年（昭和二年）に破産宣告を受け倒産しました。

（山本尚友）



京都市下京区に当時あった旧柳原銀行

メモ●旧柳原銀行は、京都市内で現存最古に属する明治期の木造建築として1994年(平成6年)4月に京都市登録文化財とされました。建物は河原町通りの拡幅工事のために除却される予定でしたが、人権の歩みを学ぶための貴重な文化財であるとして地元を中心に保存の機運が盛り上がり、現在、保存のために解体され、復元に向けて準備が進められています。

自主的な経済向上によって差別撤廃を目指した明治期の先導的な取組みを担った人々の思いと、その後の人権確立のための歴史が、この建物に刻みこまれているといえましょう。